

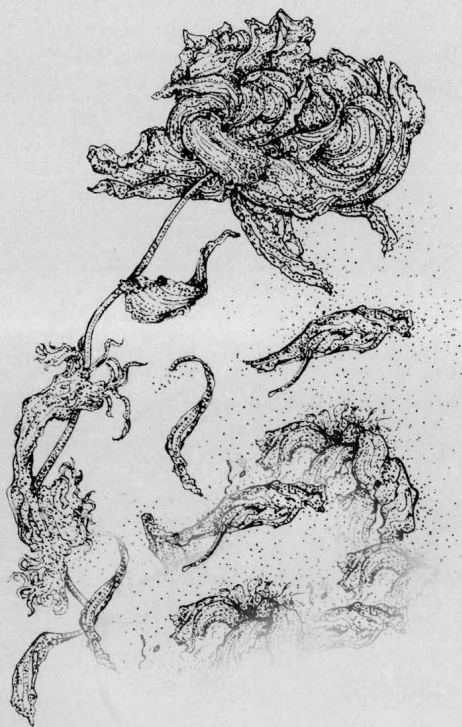
曾野綾子選集 4



曾野綾子選集

4

ぜったい多数



読売新聞社

著者紹介 その あやこ

昭和六年、東京に生まれる。聖心女子大学英文科を卒業。在学中より「新思潮」同人となり、昭和二十八年作家の三浦朱門氏と結婚。昭和二十九年「遠来の客たち」で文壇にデビュー。

『無名碑』『生贄の島』『生命ある限り』『誰のために愛するか』ほか著書多数。

本名 三浦知寿子。

現住所 東京都大田区田園調布三の五の十三

ぜったい多数^{たすう}

曾野綾子選集 4

全七巻

昭和四十六年七月十日 第一刷
昭和四十九年四月二十日 第三刷

著者^{そのあやこ} 曾野綾子

発行者 松田延夫

発行所 読売新聞社

東京都千代田区大手町一の七の二 T二〇〇
大阪市北区野崎町七七 T二五〇
北九州市小倉区明和町一の二 T二八三

印刷所 凸版印刷株式会社

製本所 協和製本株式会社

定価 六五〇円

©, Ayako Sono, 1971

曾野綾子選集

4

目次

敗北	7
平和荘	22
二つの立場	33
小宇宙	45
正気の沙汰	64
星	78
レースと薔薇	90
当り前	110
じゃがいも	125
屈辱	145
忠犬ハチ公	156

裏の裏

173

秋風立つ

187

冒険旅行

201

二人部屋

224

ボン・ファイアー

237

年末闘争

251

冬の野面

270

同期の桜

281

南海

296

解説

進藤純孝

323

装丁
村上芳正

ぜ
っ
た
い
多
数

敗北

東京駅構内を吹き抜ける風は埃をまきあげて、目を開けていられないほどだった。

森曉子は、あおられた紙屑や、小さな埃の粒がぴちぴちとすねにあたるのを感じながら、駅の中を足早に歩いて窓口のところで身をかがめた。

「三原まで……広島県の」

学割があります、と言いつうになつて、曉子ははっとした。私はもう卒業したんじゃないか、現在、この瞬間、私はもう学生じゃない。社会人なんだ。

「千八百四十円」

二等のくせに、たかい！と思つた。今までは学割ばかりで、つまりお子さま料金の旅行ばかりしていたので、急にひどい目に会っているような気がした。学生でなくなつたとたんに、世の中は冷たくなつた。

切符を受け取ると、曉子は、もう一度ぼんやりと人ごみの中を歩き出した。

これで仕事は済んだのだ。あとは今夜、二〇時一〇分の急行「第二宮島」に乗りさえすればいいのだ。あすの朝、九時四九分には三原に着く。

曉子は陽のきらきら光る朝の透明な道を、海岸ぞいの道を歩いている自分が見えるようだった。自分は気がつかなくとも、何人かの町の人が、歯医者森先生のところの娘が東京から帰つて来た、ということを見ているだろう。大学はどうやら出たらしいけれど東京に仕事がないから、帰ってきたんだね、……あの娘、先生の娘自慢では、もう少しマシなことになりそうな話だったのに……。

今、これで仕事は全部すんだ、と思つた。なるほど切符は買った。荷物はあきつて、トラック会社が下宿の部屋にとりに来てくれるようになってる。払いもすませた。友達達の生瀬弥生に、バン代を三十円かりていたことを思い出したが、それはお餞別にもらつておくことにする。

しかし、それで本当に何もかも済んでいるのだろうか。うそだ。

曉子は自分の心がごまかせなかった。

自分の気持は、てんで済んでいやしないのだ。帰りたくない。うちは好きだけれど、こんな今みたいな、どこへも行くところがないからというような理由で、郷里に帰りたいくはない。

しかし、東京にいたところで何があるだろう。このスモッグでセビヤ色にどんよりとにぐった町には一千万人の人間がいるというのに、知らない人ばかりだ。誰もたすけてくれない。誰も話しかけてくれない。通勤バスを待つ列にわりこんだ男を注意した人が殴られても、みんな手助けを

しようともせず、ぽかんと見ていた、という冷酷な町なのだ。酷薄非情の都会だ。

八時までの時間をどうやってつぶそうか、と考えた。少しばかりの手荷物はもう駅の一時預けに置いて身軽である。

映画でも……いや、酒を飲もう。二十二歳の森暁子は思った。

四年間も暮せば、さすがに、女ひとりの生き方はさまざま知っている。暁子は目的地までぶらぶら歩くことにした。

暁子はお濠端^{はうたん}を日比谷に向って歩いた。

東京に別れを告げる酒ではない。むしろヤケ酒である。やけ酒だが、純粹の酒を飲もうというのでもなかった。ビールである。やけ生ビールを飲もうというのだ。

生ビールだけが目的でもなかった。日比谷の近くに新しくできたビルの屋上にあるビヤホールは、東京の眺めが実にいい。美しい風景ではないが活動している労働者のような生き生きした複雑な景色である。

暁子は自動式のエレベーターに乗ると、三人ばかりの乗り合せた男たちが、めいめい自分たちが下りようとしている階数を書いたボタンをきびきび押して行くのを見ていた。

3・5・6

みんな働いているのだ。

六階で最後の一人が降りてから、ようやく暁子は氣をとりなおして、R（屋上）のボタンを押した。

屋上のドアが開くと西陽が踊り場にもえるようにさしこんでいる。野外のテーブルの、眺めのいい席をえらんで腰を下すと、暁子は、ボーイに生ビールを注文し、それから、ハンドバッグを開けて、母の手紙をとり出した。

「あなたは人生に少し甘い氣持を持っているのではありませんか」

いきなり書き出してあるように見えるが、実は便箋^{びんせん}の二枚目が一番上になっているだけの話である。

「三原へ帰るのはいいやだ、などとダダをこねていますが、それなら東京に何かはつきりした仕事があるのですか。お父さまも私も、何が何でも帰れというのではありません。東京で、しっかりした生活の目標があるならよろしい。

お父さまがせっかくつけて来て下さった、県の觀光課のお話もあなたはことわってしまった。しかし今なら、青年商工会議所の口はあります。先方でも、早く帰ってきて勤めてくれれば、と言って好意的に待っていてくれます。青年商工会議所なら、同じ勤めるにしても、上品な雰圍氣^{ふんいき}だし、私も賛成です。

無理に勤めなさい、というのではありません。こちらでお嫁に行くというなら、お父さまも私も一番安心です。ただあなたが、大学を出た以上、何とかして勤めたいということから、こうして二人は一生けんめい、あちこち奔走してい

るのですよ。世の中はあなたが考えるほど甘いものではありません」

はいはい、母上のおっしゃる通りでした。

手紙を膝においたまま、ボーイが運んで来た生ビールを、暁子は、ぐいと飲んだ。

森暁子は東京の生活に敗れて古里に帰ります。錦をかざるのではなく、白旗をかかげ、ボロを下げて帰ります。帰りますから、あとは煮てくおうと、焼いてくおうと、好きなようにして下さい。東京で適当な就職口もなかった以上、私はおっしゃる通りにいたします。青年商工会議所に勤めて、そのうちに、ウマイ嫁入口を世話して頂きます。

手許のビールのコップの中には、どれだけの埃が舞い落ちていたことだろう。暁子は母の手紙をハンドバッグにしまいこむと、時々あおるようにおどりこんで来る春の突風に吹きさらされながら考えた。放射能塵、煤煙、なんでもかんでも落ちてくる。つまりそれに耐えられるような肺臓と胃の持主でなければ、都会には住めない、ということなのだ。

暁子はちびりちびりと、(あまりビール飲みらしくもなく)ジョッキを口に運びながら、あたりを眺めた。

中でも、向うのテーブルにいる都会風のアベックがいやでも目につく。男の方は黒っぽい背広にノータイ、それに黒いサングラスをかけていて表情は見えない。長い脚を豪放に組んでいる。

女の方は後向きで、これは顔は見えない。鮮かな青色のスーツを着て、どことなくヴェトナムのゴ・ジンニユ夫人みみたいな髪型をしている。

青年の方は姿勢がいい上に更におうように椅子の背にそりかえり、女の方は、心も体も青年に向つてのめりこむように前かがみである。

その時、がちゃあんと大きな音がして、そんな音ぐらい別に何でもないということにはわかっているのに、暁子はびっくりと体中の筋肉がけいれんするのを感じた。ボーイが、ビールのジョッキを二つコンクリートの床に落したのだ。

青色のスーツの女は、呆気にとられたように、そそうをしたボーイと床に散らばったガラスの破片を見つめている。

その時だった。暁子は、サングラスの青年が、こつそりと大きなあくびをしたのに気がついたのである。音をたてない、しのびやかなあくびではあるが、まさに退屈で退屈でたまらないので、相手の目を盗んでやったような不遜なあくびである。

少くとも、女は事件に注意を奪われている。しかし、青年の方は、そんなことを知っちゃいないのだ。ビールが勿体ないとも、ボーイがかわいそうとも、何とも思っていないのだ。

そのアベックも二三分すると立ち上って帰って行った。

帰ろう。私も帰ろう。もうちつとも早いことはない。これから、どこかで、軽くお腹ごしらえをして、それから、席をとるためにホームに並んでいたほうがいいのだ。

暁子は金を払って、エレベーターを待った。赤い数字は、今、ハコが下りて行くことを示している。ひけどきにぶつかったらしく、各階に丹念に停っている。

上りは比較的早かった。三人の男たちをのせてエレベーターは屋上で扉を開いた。

暁子は乗りこみ、1のボタンを押した。ドアが閉りかかる。

そのドアを、外から手がおさえた。手ばかりではない。よく磨かれた靴もドアの閉るのをはばんでいる。自動ドアは、そうした強引な人間の意志にすなおに従って、もう一度おとなしく全開した。

乗りこんで来たのは、先刻のサングラスの青年であった。青いスーツの女はどこへ行ったのか、彼一人だけである。

自動式のエレベーターのドアは、どんな取扱いを受けても莊重にふるまうのが暁子にはおかしかった。

青年にこじあけられたにも拘らず、ドアは再び一定の間だけ、おごそかに開いてから、やがてゆっくりと閉るのである。しかも、青年は黙って軽く腕ぐみをしているだけなのに、エレベーターは、先刻、暁子が押した行先の1という数字をちゃんと覚えているらしく、やがて、ハコはす

うっと勿体ぶって下り始めた。

しかしそれは、すぐ停った。この下の八階で誰かが乗ってくるのだ、と思っていた。しかしドアはいつこうに開く様子がない。

何秒間か経って、初めて、暁子の心に、或る不安が襲った。

青年もこちらを見た。

「おかしいわ」

暁子は言った。

「ボタン、押しました？」

青年は落ちついた声だった。

「ええ」

彼は改めて1のボタンを押してみた。それからエレベーターが今何階にいるかを示す、文字板を見つめた。エレベーターは確かにどこかで停っているにも拘らず、計器の電気は消えている。

「故障だわ！」

暁子は頭に血がのぼってくるのを感じた。今、ここは、屋上と八階の、丁度中間あたりの筈だ。もし、このまま下へずどんと落ちたとしたら、人間もハコもこっぴどみじんだ。

青年はおもむろにサングラスをはずした。それから、一定の間をおいて、いくつか、違ったボタンを押してみた。その行動の順序正しさが、いくらか暁子の気持をしずめ

た。

「どうやら故障らしいな」

青年は呟いた。

「困ったわ、私」

暁子は口の中が乾き切っているのを感じた。

「どこかをブン殴ると動き出すかも知れないナ」

「そんなこと、よして下さい。下へ落っこつたら、こっぴみじんです」

青年はあるかなきかの微笑をみせた。それから、計器板の一部にとりつけてある金属の蓋のようになっていところを開けると、中から電話機をとり出した。

「はい、電気室ですが……」

「エレベーター、途中で停ってるんだけどね」

「は？」

「閉じこめられているんだ。何とかしてもらわないと困るな」

「は？ それは又！ 今早速調べますから、ちょっと、お待ち下さい」

電話が切られると、青年は手にした受話器を元のようにおさめ、暁子を見て笑いながら言った。

「僕はいいけど、あなたは、見も知らない男と、二人きりでここに閉じこめられているわけだ。それを、今、言ってるのを忘れたな」

暁子は相手を睨みつけたままだった。

青年は相変らず、腕ぐみをしている。心臓の音が、相手のところまで聞えそうな沈黙があった。

やがて、電話機がジーと鳴り始めた。

「はい」

「申しわけありません。今、外からもボタンを押して呼んでみんですが、動きませんので、早速、補修会社から技師を呼びますが、その前に、まず赤でセイフティ（安全）と書いてあるボタンをお押し下さい」

「セイフティだね」

「お押しになりましたか」

「ああ、押した」

「それで固定されましたので危険はございません。御心配はありませんから、どうぞ、しばらく、そのままお待ち下さい」

「お待ち下さいなんて言われなくなつて、出られないんだからね、待つほかはないじゃないか」

「申しわけございません。中には何人さまくらいおいででございますか」

「ぼくのほかに、若いお嬢さんがひとりきりでね、ぼくも困つたことになつたし、そっちの責任は大きいんじゃないの？ お嬢さんは泣いているよ、君」

「は、もう、大急ぎでいたしますから……」

「大急ぎつたつて、どれくらいかかるの？」

「今、連絡をとっておりますが、三十分……一時間くらい

で何とか……」

青年は受話器を置いた。

暁子は時計を見た。五時十五分だった。

「まあ、しょうがないから、ゆっくりしましょうや」

青年はポケットからシガレットケースを出し、暁子にもすすめながら言った。

「私、けっこうです」

青年はライターを出して煙草に火をつけた。

「まあ、幸いにといいべきか、あなたも僕も、さして急ぎの仕事があるとも思えない……」

相手は笑っている。暁子はかすかに腹をたてながら言った。

「そうでしょうか」

「なにか、約束あるの？」

「ええ」

「そんな約束、忘れちゃいなさい」

「ところがそういえないんです。汽車に乗らなきゃいけないですから」

「汽車？」

「ええ」

暁子は相手の顔を見つめた。

「ほんと、かな」

「八時の急行なんです」

「それならあなたは、多分、乗れないな」

「どうして？」

「僕はそれまでになおらないとみている」

青年は妙に確信ある口調で言った。

「どうして汽車の時間までになおらないと思うんですか？」

暁子はまだ用心しながら青年に尋ねた。

「一度、そういう目に会ったことがあるから」

「あなたが？」

「僕が閉じこめられたわけじゃないけど、そういう事件がおきてね。なおし屋がかけつけて来て電源を切って手でまきあげるわけよ。だけどちょっとした仕事だから、中の人間を脱出させるまでに三時間くらいかかったから」

三時間！ 暁子は表情にこそ出さなかったが、タスケテクレ、と叫び出したいような気持になった。

「普通、ビルができて三ヵ月くらいは、エレベーター会社の技師が機械の様子を見るために常駐している筈なんだけど、このビルはもう一年ぐらい経ってるしなあ」

どうしてそんなことを知っているのだろう。暁子は、かつとなった頭が少しばかり冷静になるように感じた。

「どういふところに故障がおきたのかしら」

「それは僕も知らないな。僕、なおし屋じゃないから」

言いながら暁子の方を見て、青年はにやり、と笑った。

「そんなに隅っこの方にひっついてなくなっちゃっていいじゃないの。僕、そんなに油断のならない男に見えるかなあ」

気がついてみると、暁子は狭いエレベーターの一隅に、びったりと体を寄せて立っているのである。

「この方が楽ですもの」

「ねえ、二人が睨み合ってたって、話をしてたって、同じ三時間なんだから、仲よくしない？」

「三時間ていうのは、あなたの計算でしょう。管理人の人は一時間って言ったわ」

「そんなことどっちだっていいじゃないの」

彼はあたりを見回した。

「全くないたって、ないたって、徹底して何にもねえなあ」

「なにが？」

「家具がよ。ソファか椅子があれば言うことないんだけどなあ」

彼は胸のポケットからハンケチを出した。

「坐らない？」

彼は、エレベーターの中程の壁にそってハンケチを敷いた。

「三時間、歩きもせずに立ってたらくたびれるよ。僕は平気だけど」

どうしても三時間と決めているらしい。

彼は無造作に、真中の床に腰を下した。そうされると、下から見上げられるのが落ちつかなくて、暁子も言われるままに、彼が拡げてくれたハンケチの上に坐った。

人間がどなっている声が足下の方で聞えた。

「お友達は？」

暁子は青年の連れていた青いスーツの娘を思い出しながら尋ねた。彼は彼女といたたいどこで別れて、エレベーターに乗ったのだろう。

「友達？」

青年はちょっと思い出せないという顔をしてみせた。

「さっき、一緒にビールを飲んでらしたでしょ」

「ああ、あれか？」

「――」

「あれは、きわめて事務的なつきあいだね。御用は承りましたし、僕はまだここで用事がありますからってウソついて、先に帰した」

「そのあとですぐこうなったところを見ると、天罰テキメシね」

「それなら君もさ」

彼は言い返してから真顔になった。

「汽車って、どこへ遊びに行くの？」

「遊びじゃないの」

「じゃ、なによ、社用？」

「私、無職なのよ、一月くらい前から」

「その前は何だったの？」

「学生」

「そうだろうと思った」

「あなたは？」

「何に見える？」

「お金持の親のスネをかじっている……」

「学生じゃ、ない。君と同じだな。三月にちゃんと卒業しました」

青年はもう一度笑いながら言った。

「悪用しないからさ、何という名前？」

「森暁子。あなたは？」

「大滝正紀」

答えてから、突然彼は言った。

「バカだなあ、君も」

言い方に悪気がないからいいようなものの、そうでなかったら、相手の顔をびしゃりとひっぱたいてやってもいいような言葉である。

「どうして？」

「くにへ帰るなんてバカだな。東京にいりゃおもしろいことも一ぱいあるのに」

「どうしてくにへ帰ると思うの？」

「だってそれ以外にないじゃない。今、無職で、遊びの旅行じゃないんでしょ」

暁子はぐっとつまつた。へらへらしているみたいだが、

案外、推理は正確である。

「東京にいたってあんまりいい仕事がないから帰るのよ」
暁子は素直に本音をはくことにした。

「帰ってどうするの？」

「まだ、どうするか、わからないわ」

暁子は青年商工会議所に就職する件まではこの見ず知らずの相手に言いたくなかった。

「もう、切符買ったの？」

暁子はうなずいた。

「ほんとかな？」

暁子は黙ってハンドバッグから財布を出し、切符と急行券と、二枚を出して見せた。

「三原か。何県になるの？」

「広島県」

彼はその間に、そろそろと内ポケットをさぐっていたが、やがて、暁子と同じように、財布を出し、二枚の千円札をその中からひき抜いて、暁子に手渡そうとした。

「この切符、僕が払戻しするから、お金受けとっておいてよ」

「なぜ、あなたが、この切符を買うの？」

暁子は呆氣にとられて、さし出された二千円と大滝の顔を等分に見くらべながら言った。

「君がこの切符を持っていると、汽車に乗ることばかり考えるからよ」

暁子は黙っていた。

「そこでモノは相談だけどき、要するに、君は、東京で適当な仕事があればいいんでしょ」